

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 5



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地 中 海

二〇二一年五月号 (通巻七五六号)

◇ 今月の二十首詠 …… ひかり

檜垣美保子 2

■ 歌壇月旦  
震災歌、そして

西堤啓子

■ 作品[A]

滝田靖子・虎谷信子 4

◇ シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子

田口紀久子他 20

私と短歌との出会い (225)

本元由美子

■ 作品[B]

高橋迪江他 74

遊覧寄港

〈孤独と読書と短歌〉

風早公恵

■ 作品[C]

飛田久栄他 87

三月号作品批評

久我田鶴子

■ オリーブ集

安部 律・石田明彦 64

A

藤田美智子・潮田千代

92

◇ 今月の二人

やまもとしづ・大寺智子 16

B

高橋啓子・根岸 亮

72

◇ 今月の生きものの歌

31

田土成彦 15

C

中村博子

19

◆ 特集・東日本大震災から十年

八乙女由朗・根岸 亮・宍戸千佳子・鈴木剛之

阿藤たつる・三浦好博・菊地栄子・上林節江

今野勝子・鉄地川原朱美・江尻リエ子・横田敏子

伊東ミイ子・鈴木結志・石井悠子・福田庸子

今野勝江・谷川節子・千葉範子・林 清江

鷹野長子・吉野ふじ子・宇井秀雄

クリップ……116

神田通信……表3

最近の歌誌より

〔編集部〕

73

今月の二人・作品評

久我田鶴子

18

## ひかり

檜垣美保子

昭和三十年生まれ。

昭和五十三年「地中海」入社。  
昂グループ長。

歌集に『ジルコンの塔』『コロナの季』

がある。

風たてばくすのきに音うまれたり一月の空におくる喝采

帰りたき場所あることのしあわせよははが朝ごと「島にかえろう」

上着からいやズボンから 脱衣場にタイミング合わずははと笑つて

風呂あがりの足の先のあたたかさははに靴下はかせんとして

おどろかす意図あらざれどカーテンを引けば花から鳥が飛びたつ

飛行機の低くとぶ音曇天を遠ざかりゆく不気味なる昼

すでに亡き母親も祖母もよみがえり華やぐ雨夜ははの夜咄

青海波えがかれし藍の大皿に神社の祭りのおさがりの鯛

豆腐のうた一首のうかびきさらぎの今宵湯豆腐の湯気に包まる  
ひかりつつさらわれゆきし川魚を思い出ししつさらわれたくて  
にんげんの重さを感じし鳴るマットははの歩みをさえぎつて  
いるどこからを夜と呼ぶべきや二十五時ははの歩みに添いつ歩く

一階の納戸の壁に夜具を寄せ獸道ならぬ夜の通い路

恋に落つその感覺のなき吾が眠りに落つる甘美なる闇

一階は二階よりはやく夜が明ける始発電車の音ひびきくる

四枚の書類に署名捺印しつづきにしてははとの関係

ひな型の書面に「長男の嫁」とあり「長男の妻」と書きペンを置く  
便宜上ははと言うされど関係はふたり暮らしの時間のたまもの  
風の午後ははに木の名を問われおりおもいがけなくその声小さし  
春近しひかりの一月あかるくて通りのむこうにはためく黄の旗

# 作品 A

滝 田 靖 子

余 震

・新

ふたたびの震度六弱恐怖よりも驚愕よりもまづは虚脱感  
またかよと口にしてみる真夜中の震度六弱またかよまたかよ  
「大丈夫か」暗闇に母の声がする停電の部屋にスマホ灯す時  
片付ける気になれなくて散らばりし雑誌押しのけ寝床確保する  
大切なるものも壊れてしまひたり招き猫ランプやる気スイッチ  
強風に家軋むたび余震かと身構へてしまふ昨日も今日も  
散らばりし雑誌もCDもそのままに一週間が過ぎてしまへり

虎 谷 信 子

雛

・伴

わが母校 百十一年を刻むとぞ。記念誌とどく 祝き申さむか  
女学校と云ひし 頃ほひ杳き日日。ひたすらなつかし 先生・友垣  
四ツ葉のクローバー 探しし藤かげ如何なるや。青春の夢抱き歩みし  
学校の前の池より きこゆ蟻蟻の声。授業中に大笑ひせし  
わが雛 九十余年経たりしよ。せめて飾らな。内裏だけでも  
五段雛かざれば 家中はなやきぬ。床の間には 桃の切り花  
裡倉の二階に 置きし雑箱。飾れぬままの日を思ひるつ

高 尾 恭 子

晴明神社

・大

雪かごを引くほどの風花てのひらに晴明神社の鳥居をくぐる  
手水なく鈴緒なき宮いにしえの跫音たたず睦月尽日  
晴明の産湯の井戸は閉ざされて耳カットせし猫の日だまり  
(*こきげんよう*) 手を振るようにベル鳴らし路面電車は遠ざかりゆく  
花道の帰路はなごりの速めがね途中下車して茶房をさがす  
(阿倍野保名郵便局)と名をのこす都市開発のはざまにありて  
街道のしるベポツンと北畠、姫松、松虫路面の駅は

高 津 砂 千 子

地 図

・風

古稀こえて挑む気持ちのいまだりはじめての道地図見つづく  
ひとりして歩ける自由かみしむる道端に黄の花かかぐさえ  
この川に沿いて歩めば着くらしき紅葉美しき速谷神社  
心にもちから湧きくる思いのす見知らぬ町を万歩あるきて  
たっぷりの墨含ませて「太陽」と書きたるのちの心ゆたけき  
歯科予約七日遅てて着きしこと今日の歩数の達成となす  
気が向けば百段階段のぼりゆく坂道多きわれの住む町

## 竹下妙子

春深し

・霧

凍つる朝 汗ばむばかり陽は照れりそのあたかき春の日に醉ふ  
春あらし過ぎゆく中を音たてて枯れ葉ひとひら追ひ越しゆけり  
散りもせず泡立草の立ち枯れて空わびしく大きく揺るる  
花は地に鳥は古巣に帰るなり一世とのまり知る人ぞなき  
春逝くともろもろの鳥鳴きかはすこの烈しさに心傷めり  
夜おそく出でたる月がひつそりと裡なるものを照らしはじめる  
夕闇も朝闇も同じ巒の色そのあはひにてオオルリは鳴く

## 田土成彦

薄紙

・宙

大きめのぼた餅二つを夕餉とし七時のコロナニユース見てゐる  
賞味期限過ぎてしまつたカステラは惜しみなく食ふ二きれ三きれ  
死にとうはないともらして世を終へし僧の言葉は胸に明るし  
鼻水を垂らし飯粒こぼしてもう死にたいなど思ふことなし  
腰痛も膝痛もあるこの冬をやぶれかぶれに寒風に向く  
あぶら気のなき指先に繰りがたき薄紙の本は嫌みのごとし  
しらみ来る東の窓を少し開け余得のことき朝の氣を吸ふ

## 田土才恵

晩白柚

・宙

誰も撒くひといなければ節分の豆一握り小声に放つ

水仙の折れて揺れる哀しさを思い出させて今日は大寒

千両の赤き実揺する寒風の庭吹き抜けるわがもの顔に

新しきケトルのひかるキッチンに冬の日差しの鈍く及べる

電子音ピピピッと鳴れば冷蔵庫いやファンヒーターかぶと戸惑える  
晩白柚今年も孫へ贈いぬ持ち帰りゆくその日数えて

ささやかな思い伝えてこと足りぬ湯タンポの湯をやかんに沸かし

## 玉井綾子

春の花

・羊

うつむいて歩くランドセル 水仙は小さな視野に春を知らせる  
目立ちたくないのに目立つ風の向きイヌフグリの花ぱりと落ちる  
玄関前バッジのことく咲くパンジー鉢無き家に春は来たらず  
膝かかえ校庭の隅にうずくまる彼を真似してカタバミの咲く  
あの人異動を聞きし休日にはミリのハコベの花を見つけし  
卒園式準備の進む園の外 寝めて撫でてとユキヤナギ咲く  
クラス替え、人事異動の年度末マーガレットは開きっぱなし

## 中島央子

ブルーに点る

・森

コロナ世の風に押されし孫の婚師走を過ぎて桜咲くころ

乳癌の術後五年を経し孫のメールの無事や白梅ふふむ

冬かわく土が音なく吸ひつく如雨露の水をぐくめるルッコラ

晩年の身に沁む言葉たとふれば歳晚晩鐘夏晚秋

恵まれて今日在るこの身舟に盛らるる鮭のはららこを食む

「緊急事態」解げざる首都の空の下高速道路の渋滞づく

友ありて歌ありてわが生のありスカイツリーはブルーに点る

## 中島義雄

余寒の月

・岡

命惜しみいのちをしみてしるがねの余寒に凍てし満月皓し

月ありて水は凍てたり水凍てて月を映せりきさらぎの尽

しんとして動くものなきささらぎの虚空を占めて懸かる凍て月

春雪は降るからにして溶けてゆきコロナ禍長く子は帰省せず

微かなる光降ることく雪落ちて如月尽の月は照らしつ

中天に月は凍てたり孤独死を遂げたる友への挽歌は成らず

まだ若き顔つきなりと人言へば生きられるかと杖突きて立つ

永塚節子　休薬

・銀

白子れい　弟よ

・弟

・洛

信じがたき主治医の言葉に聞き返すそんな事があつても良いのか  
たれかれに告げたき心地八年間飲み続きたる薬減りしを  
二ヶ月の休薬の待ち受けは吉かも知れぬ凶かも知れぬ  
喜びを押さえ難くうふふと笑いていたりマスクの下に  
努力なせば報われるもの日日の半信半疑の食事療法  
今よりは悪くはしない新たなる一步踏み出す三月四日  
空へ向くはくもくれんはふっくらと手のひら合わす祈りのかたち

仲西正子

目大千鳥

・沖

ばかりようこ

初夢

・鹿

この庭に十年分の枝を張り台湾小梅びっしりと咲く  
離れよと言いて言われしコロナ禍に頬寄せ感喜す庭梅の花  
みんなみに根付く庭梅その花の色映えまさる曼天の空  
戻り寒さ別れ寒さの身の震え籠もりおひえるコロナウイルス  
片帆張り日大千鳥の群れ白しサンゴのリーフに潮は満ちおり  
珊瑚礁埋めて軍港移設とぞ目大千鳥よ波蹴りて飛べ  
キャンプ・キンザー返還決まれどその果たて軍港移設の舡先は向きぬ

萩子空

・銀

浜谷久子

神々の食物

・地

ブリムラの濃紫や黄が呼びかけるきさらぎの空ひろびろと背  
快晴のきさらぎの空に飛び立ちし二羽の小鳥を追いつつ朝  
寒い日は「野菊」を歌うせがまれて娘は「こさむい」お気に入りらし  
新幹線がどんなに速くても故郷は遠い　逢いたかった  
赤い花咲いていた蔓をさし木して花待ちつづける年年歳歳  
若草の風吹く緑道ランドセル背負った子らと擦れ違う午後  
風はらみゆつさゆつさと竹林が何かいいたげ疊り日の朝

弟よコロナおさまれば見舞わんと思ひおりしに早や逝きたると  
入院の続きているもその妻の賀状に元氣とありて十日後  
おとなしい弟だった田の畦をランドセルやらし共に通いし  
公立の大学二つ卒業しナショナル坊や産みし弟  
弟よ黄泉にても美しき絵を書き皆の靈たまなぐさめ給え  
弟を亡くし悲しみ告ぐる人もたずて仰ぐ庭の臘梅  
立春というも冷たき風の舞う臘梅の花ほろりほろほろ  
ばかりようこ

初夢に師の君いりますお気に入りのループタイは茶色　原色のゆめ  
かつて師の君を花にたとえたる泰山木にもたれたまいて  
一月の十五日は女正月とお脣綻ばす百三歳の姉様あねさま  
百歳を越えられたれば後一歳あと一歳またと教えて唯今三歳みよなのよと  
姉もどき　妹もどき　の年月はもうもどきじゃない五十年來の  
きょうひとひの命いとおしむふいというこのいとおしさ眉月にじむ  
やよいさん音沙汰なしでホーヤレホどこで何して…ホーヤレホ

家つ芋掘れば風邪ひく土なかに春まで眼れ枯れ葉をかける  
掘りたての海老芋ほっこり炊きあがり柚子の香りを添える立春  
大寒の明るい冷たさポケットの手を出し歩く二拍子グッパ  
急いでも計の進まず走っても風の起こらずゆっくりと行く  
大丈夫、どんな場面も断言するアメリカドラマの未来を明るく  
上等のチョコレートの相伴に預かるひと日バレンタインデー  
「神々の食物」カカオの栽培の児童就労語られぬまま

# 浜本茉美

切り花

・夢

バタバタとヘリコプターの飛びおり心の奥歎息とさせ  
友のくれしクリスマスローズの切り花が部屋の中心を占めていま  
春  
残照の空仰ぎいる切なさは離りし人を恋うるにも似る  
帰りきて玄関の戸を開けざまに友のくれたるスタッフ匂う  
さくら花凜として咲き花冷えとう言葉のよきる昨日また今日  
とつくなればかりなる日本がにっぽんでなくなる兆しか悲し  
ユウレイの様な髪形はやりいてわが感覚のマヒしてきたる

# 檜垣美保子

春

・昴

川沿いの道くだりつつ桜の木百八つまでかぞえてもどる  
百本のソメイヨシノの歩道木を植えし人たしかにありき  
醤油屋のおやじでありし叔父の家橋をわたれば煙突がみゆ  
葉を落とし骨格さらす裸木が山頂までの道をいざなう  
みずから二股の枝うけとめてやじろへえの枝風にゆれおり  
大皿の出番のなくてひさびさに盛るちらし寿司木の芽を散らし  
菜の花をゆあげて春はまぐりの吸いもの椀に蓋をして春

# 福田庸子

北帰行近し

・今

闇に向かひ言葉吐きゆく老母の夢は行き来す真夜のならひに  
しみわたらる鉄路の音に乗りあはす人の体温伝へくる真夜  
重なりし枯葉の中にとけ入るや目立たぬままに冬を越したる  
しのぶかに枯葉を反す音たたせ啄む鶴もなく発たむ  
人間のたてゆく音にゆうらりとひるがへす身は枯葉に埋む  
ひつそりと雑木林の株元を今朝も歩めり鶴一羽は  
包みこむ大気の厚さふくらむを遠山脈は春としめせり

# 藤田美智子

〈ゾロリ〉

・新

幾たびも數値見やりし日のありきモニタリングボストは雪を被れる  
黙したる人らの声を拾ふべし記念日報道と言はれやうとも  
あの春のこと木蓮は芽吹きたり魔炉の前途は遠ざかりつ  
大字小良浜字高平といふ住所ありき「白地」と呼ばれ風が撫でゆく  
子どもらの戻ることなき図書室に「ゾロリ」はすつかり待ちくたびれて  
にはかづくりの街を聖火は駆け抜ける福島の「今」を見てもらふとぞ  
〈あれから〉の「あれ」とは過去のことぢやない震度6強の余震が告げる

# 藤森巳行

肉離れ

・銀

十二人一族揃ひ祈りから令和三年希望の出発  
安いから買つてきたと妻は言ふ一日遅れのバレンタインチヨコ  
コロナ禍に負けてなるかとウォーキング始めて八日で肉離れ起こす  
年寄りは無理をするなどいふことよ冷たい言葉で突き放す妻  
肉離れの痛みに堪へて二週間辛い日々でも生きてる証し  
今日ひと日時計を外し過ごさうよ風に吹かれて春の街行く  
何となく良くなりさうな予感せり三月一日新しき週

# 船田清子

いのちの力

・天

コロナ菌地球まるごと取り巻きて発熱させたりはやも一年  
しつとりと夜氣に乗り来る香りあり地中に息づくいのちの吐息  
一日の雨に目覚むや沈丁花ほつぼつ萌ゆる花芽くれなる  
沿道の並木の梢にきさらぎの寒風に耐へ残れるみどり  
卯月には梢あらたにさみどりの若葉のいのちにほひたるにや  
きさらぎの空より注ぐ陽光よ若きいのちの力たまはな  
クロに似る猫に逢ひたり「ニヤン」と声かくればしばし見つめられたり

牧 雄彦 赤き糸

・大

松永智子 影

・嵐

赤き糸部屋いつぱいに張られたる作品に酔ひ春の風吸ふ  
展覧会出でて見知らぬ町をゆくいまだつめたき春風うけて  
思ひ立ちて友訪ねむと人通り少なき寒き道たどりゆく  
陽光は春めきたるに寒ざむと音報音鳴る踏切に立つ  
線路沿ひの道一本目を右折せり長らく癌を病む友訪ねて  
入りつ日に光るこの道ふたたびを辿る日あらむか春の雪舞ふ  
級友は一人逝きたひとり病む私鉄の駅に風花が舞ふ

松浦禎子 おもかげに

・羊

秦野駅すぐの時今もおもかげに慎二郎若く地中海もまた  
小田急の食堂に倒きある時のコック姿にまなこ細めて  
小田原のこの駅なに倒れたるあなたにすれば本望のとき  
金太郎も翁となりていでこぬか上足柄の地名いとしむ  
ひと息に白雲洞をめざしたり八十をいくつまだ生きていて  
痛む膝くずして見上ぐ床の間に白雲紅樹軸の一幅  
白雲を机にしほみし先人のおもかげとして維新ありたり

松瀬トヨ子 若葉風

・沖

若葉風樹々の香りをこきませて吹きくる窓辺コロナに負けるな  
介護車を降り立つ大男今日の仲間に高く手を上げる  
ケア室に昔を語る老人ら「いくさよしてはならんどう」野辺の芒穂  
花びらのように皺たたむ九十歳マイクに唄う「十九の春」を  
空爆を画面に見入る娘らの「あんやたんや」母のケアホーム  
会果てて急ぐ家路に黒猫の光るまなこが間に消えたり  
トンネルを抜けければ首里の城ト町飛車のことくに奔るモノレール

あかときの音いまだなくしづもれるビルのひとくまにきく間の音  
書きとむることばのあはし伸ばす手のとらぶるものがあらずあかとき  
灯のもとにうごくともなき影のありただ一人なるにんげんの影  
午前三時衝にいまだ音のなく森閑として人ひとり行く  
音絶えしまますなるビルの夜ふかく灯をともしたり何するとなく  
さめて聞く夜ふけの音なる昇降機人のいのちのあかしなるごと  
ビルの音術の音の絶えしまま闇の音のしづかなる夜半

三浦好博 百鬼夜行

・銚

三・一百鬼夜行の始まりは不気味に光るアンタレスなりき  
五万年前に言語を獲得す核ゴミ無害は十万年後  
七十年前の石切場の穴に塵芥あまた死体もあらむ  
受け入れ先搜しるるむ救急車過ぎてまた来るサイレン鳴らし  
忙しなき歯科医師 指がああ直ぐに隣りの患者の口から我へ  
常勝のボールの柄はコロナ菌グランドゴルフを始めて五年  
選別後雄は直ちにシユレッダ一六十億四ヒヨコのいのち

宮本靖彦 迎春花

・凌

恵方巻露天の販売今年見ずスーパーにちんと定価で並ぶ  
歌手の喜寿コンサート締むる歌「マイウエイ」に我が涙腺ゆるむ  
暖かさもどり来し日に土を掘り樹々に肥料をボロネーゼ聴きつづ  
迎春花和名みつまた紹興ゆ持ち帰り三十年道まで煮る  
京北にきよらに澄める蔚の歌摩耶に聞きしは父との思ひ出  
広辞苑片手で掴むが重くなり椅子傾けて両手で捧ぐ  
疲れなき早春の頃小柄男は湖マラソンに日本新達つ

### 三 好 聖 三

通

・伊

もとむらしげと

ミモザ

・そ

妻も子も美味し美味しと食べている鳥賀の塩辛 衡立が欲し  
草々の太古由来の力かな刈りても間なく生えわたる くそつ  
銀鼠の海のたいらを下に見てむすびを食べる伐採のあと  
一隻の船がゆくゆえ遙かなり荒れで貧しきイエメンの海  
貧しさがテロルを生むという言葉にわかれりの 頭 をよぎる  
七十を過ぎたら少し落ち避けと闇の鴉が 頭 をつつく  
鮭わかめご飯を今日も所望して妻に舌打ちされる夕ぐれ

### 御代田澄江

応援

・茨

飲食店宮む友の応援と娘は我が誕生日の膳のデリバリー頼む

月毎の亡夫命日の精進膳も頼まんと娘は真剣に言ふ

店舗改装什器改新後のコロナと知る故の思ひか我も肯ふ

春一番早々と吹く二月四日我を花粉の嵐が攻める

目鼻耳痒し花紙離し得ますます家に籠るほかなし

針供養二月八日を忘れ居きマスクを縫ひし日もありたるに

家籠りテレビ逍遙「世界ふしき発見」徹子さんの着物姿に逢ふを楽しむ

### 茂木斌

雪椿

・埼

きさらきの庭に白雪花椿ひと筋紅をいれて咲き出づ

願はくば天衣無縫の歌生れよきさらきの光の窓にあふるる

誕生日子の送りきし叙々苑のライスバー ガーけさはチンする

八十歳残る歯二十一本に八〇二〇わづかに凌ぐ

バーミヤン野菜たっぷりタンメンにたっぷり過ぎて胃があくびする

巨杉あり捲かれし注連縄もさがりたる四手もまつさら越沢稻荷

コロナ禍に静かな宿の大浴場ほろ酔ひの身を水母のことく

### 山下雅子

同い年

・習

青空に相応う鳴き声嬉しげに届託のなき明るさならん

煌々と空を染め上げ変わりつゝ夕日の余韻しばしたゆたう

落日に包まれて立つ高層のビルの表情こっこく変わる

ゆくりなく婚殿からのみやげなる地酒「牧水」胃の腑にしみる

小春日のひかりあふるる窓の辺にぬくぬくと脆き骨よろこばす

還暦を超えし娘は東海の原発となんと同い年なり

ワクチンの初動日河野大臣の炭治郎マスク幸先招け

### 山野幸司

峰

・沖

ふりそそぐ日を浴びながら戯れる菜の花畑われはミツバチ

柔らかき草に降り立ち蜜求むハチの樂園君と彷徨う

絵本より飛び出す子らと遊びたり束の間の幸夢より覚める

ふんわりと君と手を取り駆けていく夢物語り絵本読みいる

しっかりと握る自動車真赤赤保育園迄お供して来る

庭に張る芝を駆けいく孫達の隠れ家木陰歌流れ来る

庭を掘る吾が側を離れないジョウビタキさん春の運び屋

山本 孟 続家ごもり

・大

吉永惟昭

作務衣

・熊

一月の雪雲風をともなひて天の切子かダイヤモンドダスト

三寒に嵌めし手袋片方を落とすいづこに亡骸のことく

家ごもりひと日もの言はず残り物食べ終活のメモなどなせど

われ「飲む」はコーヒーのこと三密なく自宅に名曲喫茶再現

読む事書く事見る聴く事に妻亡き後は「話す事」久く

「と言つちやあ」と江戸つ子弁もとび出して真実語る半藤「昭和史」

「87歳老衰」の記事に目を見張る89歳食欲あるに

### 養学登志子

春来ぬと

・凌

磯田ひさ子

かぐのこのみ

・森

如月の風はものみなかがやかせ木々の芽草の芽起きよおきよと

近道して梅林斜めによぎるときぼころびそめし一輪を見ぬ

ものの芽のわからぬうちは抜かずおくどんな未来があるやもしれず

春きぬとふいに唱歌をくちばさむ忘れしころラーララにして

遠き日のままこと遊びの続きかも季のうつろい卓に並べて

ままごとの馳走を祖父がほめたから月命日には小さきお膳

露の蓋出で来る頃の命日は朱のうつわにほろほろ香らせ

### 横田敏子

地震再び

・福

市原やよひ

白梅

・萬

3・11忘るるなかれと言うことく巨大地震が再び襲う

倒れたるテレビ無事なり真夜中の「津波の心配なし」に安堵す

玄関に花を活けたるガラス花器落ちて粉々 破片、花、水

取り敢えず倒れし神棚、位牌など整えるのみはや午前二時

明ければ被害おちこち玄関のレンガの剥れ瓦の落下

二日目は雨となりたりブルーシート届かぬままに雨漏り始む

三月は重き月なりわたくしの心があの日に引き戻される

不精髪伸ばせるままの二ヶ月をマスクが匿す不急外出

閏年の如月尽く日散策の道に作務衣か我にそぐわぬ

百一歳の姉が贈りし作務衣なるゆく先は孫一息つけた

ステージがインドネシアになりわいはボーカルという風来の孫

この国で一番知られた日本人なぞ囁きぬ襟を正せや

不惑の身この作務衣にて包めかし音宗一如禅などいかが

作務衣にて南十字を仰ぎ見る漢思いぬふるさとは雪

向ま向まに枯れた枝をなだめつつ萩のひと群れ円く括りぬ

寒空に花芽かかぐる庭の隅うぐいす色の目白來てゐる

何鳥か止まりては消ゆしろがねの花の穂闌けるやなぎの辺り

一束の葱の葉先の銛きをたためば音をたてたり

ダンボールの箱をかたむけ西浦のかぐのこのみを春陽にあてる

むらきもの心弱れば金色のかぐのこのみを身ぬちに納む

如月のわが誕生日えにしたの鉢を抱へて二人娘の来る

大雨の中来訪予定二つあり訪問リハビリ・ケアマネージャー

# 梅本武義

小綏鶴

・羊

目覚めれば小綏鶴が呼ぶ午前歯科午後は内科へ行かねばならず  
青春の思いか無二の親友は一年経て知る亡くなりしこと

散策をする冬木立群れ来たる小鳥はエナガ我も木となる

倒す位置ワイヤーを張り決めるを木にも意地ありそつとはならず

掘り起こす菜園に来たる尉鶴すらりとなりぬ去る日の近し

春耕の音の消えたり海を越え四国連山浮かぶ夕暮れ

夕暮れの菜園に燃やす枯れ木々の炎の踊りが今日の幕引き

# 大浪美雪

菰

・森

御勤めと言えど寒中零下にも床の中に聞く明六つの鐘

明け方に雨降りたるか湿りたる雨戸を縁るや水の香のする

菰の中開きかけたる冬ぼたん黄色き蕊のさわにのぞきぬ

冬ぼたんを囲う盛土の滑らかさシフォンケーキのような温もり

間合いとりゆつたりとゆくぼたん園霧柱は立たず真白なる棘

ぼうたんは和服のおみなを連れてこそ前ゆく一人を見つしみじみ

夕映えの始まる空の奥深く行きしものあり黒く小さし

# 奥田陽子

冬の星座

・羊

コロナ禍の冬の至りぬ干あがりし川床白く落葉積みゆく

追いかけるごとくに来たる喪のたより松の飾りの取れたる頃に

喪のふみにわれの知らざる名のありと訊けばおどろきの声返りたり

そう言えば去年の賀状は来なかつた 背に聞きつたより読みゆく夫逝きしをいたく簡潔に告げる言葉に出さず咸つ一葉

病みてまた老いて返信の無き人をおもいて今年の賀状を咸つ  
冬の星座この夜見あげぬ密寂無き時の流れにまた人の逝く

# 神田鉢子

スノームーン

・大

枯れ尾花夕日にひかる道をゆく通ひなれたる川沿ひの道

満開の紅梅の枝見つけたり思はず身を寄せ春の香を嗅ぐ

縋ひぐるみと紛ふばかりのマルチーズわが目と合へば尾を振りてくる

カラフルな服を着せられ散歩する小犬は人のアクセサリーか

一本釣りの鯛の刺身は隣家より今日のしあはせ舌に溶けゆく

胡蝶蘭の苔がやうやく開きそむをとし届きし嫁よりの花

きさらぎの空にひそけく輝けり今宵の満月スノームーンは

# 菊地栄子

ミニバラ

・湾

再びは転ぶまいぞと凍結の路面に踏み出すゴムの長靴

かるがると飛ばされてゆく枯落ち葉減量進まぬ四肢の重さよ

「角田市」の読みに焦点定まらぬ今朝の疊碌を強く意識す

家中に取り入れし鉢のアロエベラ多肉の葉先の伸び止まらず

三ミリ程片上がりする額縁と見ていく治療の終わらぬ椅子に

新しき苑のベンチに掛けてみる二月の空は白雲速し

凍結をおそれ睇う造花なりそのミニバラのかもす明るさ

# 小野雅子

立春

・羊

立春に豆腐を食ぶる慣はしは知らざり けふ食べてみる

恵方巻、立春に豆腐 知らず來し慣はしに染まりゆくも樂しき

江口氏の通夜の帰りの食おもふ魚と野菜の黒酢あんかけ

噛むことが大切といふ老年に齒を直しくる歯科医に感謝

バスの本数減らされてて立ち尽くす緊急事態宣言、延長  
午前中の短き会議に疲れたり使ふ途なき今年の会費

たちまちに会計報告でき上がる支出コピー代ばかりの一年

## 北山雪男

残日抄

・伊

## 國井節子

迷ひ

・春

足早に近づく虹のありしこと誰にも告げず齡重ねたり  
 予定より長く保ちて來し四肢に絡み縛る人の世の風  
 家に潜む如月旗日 積もる雪、積もらぬ雪とこごも荒み  
 理由ありの妻の不在のテーブルに酸いも甘いも夜の〈不知火〉  
 日記には誌さぬ仔細いちじくの葉陰に秘する今日にあらねど  
 ほそぼそとマスクの下にて息を吐く心しづめて羊の息吐く  
 雪解けのかをり未だし ひとまづは首を竦めて如月晦日

## 木村文子

祈り

・羊

自死という言葉に胸は貫かれ吹き抜けてゆく生臭き風  
 はらわたの 魚の匂いの風のなか 答えの出ない問いが漂う  
 まなこには強い光が宿りおり生きる生きたいただ生きたいと  
 絶え間ない強い痛みに耐えるとき祈りとなりて汗はこぼれる  
 自死という思いを心に許すとき死は懐かしく夏服のごとく  
 濃く強い生が完結する瞬間見守っていたのは新月だった  
 空にあるそらを思えばそのそらは果てなく光の溢れるところ

## 草刈十郎

冬木立

・世

ひとつ木に白梅の枝と紅梅と枝を分かちて別々に咲く  
 数多ある大阪城の梅林の中なる変種「思ひのまま」とふ  
 住み馴れて五十余年の歳月に吾と同じく家も老いたり  
 貞繩る人差指のつるつるで洗ひし茶碗を危ふく落とす  
 大和路の史跡めぐりを楽しみに歩きし頃の若さなつかし  
 早春の庭にかがみて草を引けば春の近づく息の音のする  
 捨つること今年の課題まづはわが心を鬼にし迷ひを捨てむ

## 河野繁子

如月の里

・雁

寒き季咲く蠟梅の花ざかり冬将軍との出会い楽しむ  
 風の日のセリバオウレン葉のなきに春を持ち上げ線香花火  
 節分草咲きし知らせにほっこりと心のぬくむ春渡されし  
 我が庭に下萌えみつく福寿草となりの群れはもう花ざかり  
 冬将軍とお別れのとき蠟梅の終わりの花に春の雪つむ  
 メタセコイア銀杏と並ぶ二本の樹窓の遠景社は見えず  
 コロナ禍のややも下火の一月尽つぐみ歩むを立ち止まり待つ

## 小林能子

黒松林(回想)

・羊

新年も終はることなきコロナ禍に白衣の天使走りゆるなり  
 今日もまだ命ありけり一人酌む熱燐の酒愛ほしかりき  
 過酷なるコロナ・ウイルスもう少し元氣でんたし卒寿となれど  
 コロナ禍の家居の日々はいつまでか自問自答の冬籠りなり  
 限りある生命のなかの卒寿をば祝ひ年酒を親族と酌む  
 春となれば芽吹き命を輝かす冬木立じと色宿しをり  
 久に降り積もりし雪にそれぞれの姿見せをり庭の木々らは

近藤栄昭 コキコキ

・虹

坂出裕子 鶴

・洛

足元がコキコキと泣く新雪にワクチンはまだ四月の噂  
赤城山雪形消える木隠れに春は息吹くと信じております  
降らぬ雪予報が怖い関東にわずか伝わる北国吹雪くと  
新雪が溶けて緑の花濁らすクリスマスローズ冬を抜け出す  
疏水の石一重に囲む花筏次の石へと飾りつきゆく  
システムがなきか動かぬ日本國傾くごとく危うく立ちぬ  
ワクチンを生産できぬ戸惑いに老いの平安幻なるか

近藤芳仙 散歩

・信

かたぶきし日差しのつくる姉の影をどりこ草の咲いてる道  
暮れなづむ空を横切り影おとすカラスの群の音なきわたり  
遠山の峯の冠雪うすれつつ風もかすかに温もりてくる  
ポストよりもば穂の香たつ包み渦の鳴門の友健やかに  
散歩より帰りつく部屋くらがりに飯炊ける音甘き香たてて  
亡夫の跡亡母の跡をこえて生く散歩をかてに足を鍛へむ  
いつ果つる命か知らね一日をわがものとして満たしゆかむか

坂上直美

君なき二月

・天

節分会鬼にてもよし帰り来よ春を待たずに逝きし君はも  
君がためゴディバのチョコを奮発し購いにけり在りし日のまま  
久々に母の夢見き傍にいて抱きしめぐれぬ言葉なきまま

夢の中桜花びら舞い踊りわれを眺みて連れ去らんとす

この世ともあの世ともなく桜散る黒髪ながき女も老いたり

君が遺す『万葉集古義』今日も読むみもと行くまでに読み切らんとす  
せめてもと玄関の色紙難にかう君が写真にあられ供えん

渡り鳥あまた休みてゐし昨の水の面の何事もなく  
群れをりし鳥の姿をまぼろしに朝の川のほとり歩める  
数十羽鶴の群れるし川の面のまぼろしならす幻なるか  
まなぶたに浮かぶ静かな鶴の群いこひをりたり水の面に  
水はただ静かに光りるたるのみ鶴のをらざる川の面を  
幻を追ひて歩める数十羽鶴のをりたる水のほとりを  
白き鶴あまた居りたる川の辺に鶴を求めて今日もたたずむ

佐久間晟 戦い

・湾

夏になれば毎年思つ事なりき戦に死にし友の幾人  
生きるとは罪惡と言われし世代なりき戦は正しきものと教えられ  
われどても死は覺悟して軍の学校に入學はしたけれど戦は終わりぬ  
生きていて良かったと思ひしは暫くのこと今はすでに諦めのこころ  
残る歌ひとつも無くて歌人とか言われ続けてまだ生きている  
死ぬことの美しさなど既に失せ生きる尊さなどは言い古される  
生きる事に言い訳しつつなお生きるこの哀れさを何と見るべき

佐藤道子

梅咲く

・甲

梅の香のほのかに匂ふ散歩道夫の気配がそこはかとなく  
梅の香の薫るむかうに夫がゐて花の山にて日向ぼこする  
若き日の夫の写真に私を添へて偲びぬ遠きよき日を  
遠き日に何も思はぬ日向ぼこ夫と眺めし空背かりき  
夫と私梅咲く山に一休み子は香に包まれて写生せしこと  
梅の花散らして飛びたつ小鳥達はばたく音の今も聞こゆる  
何事もなく過ごせし日は宝思ひ出のみを生きるよすがと

篠原まり子　如月

・羊

関根栄子　赤べこ

・埼

冷凍の小さきシジミ水に放つ蒼く息して開く貝殻  
閉ざさる貝が開けばすまし汁いのち幾許私のもの  
瀬田シジミタナリありて「大きいね」常に言う人傍えに在りし  
ミュージック突然断たれ大地震の深夜放送朝まで続く  
津和野にて安野美術館訪ねしは「絵はね　心が描くものです」  
着膨れの女の子のシール残りいる眼差し憶う安野光雅  
人の手に委ねられたる座敷梅競いて咲くを哀しみとして

柴田登志恵

呼吸

・天

関根和美

十分

・埼

まだ意味をなさぬ赤子の言葉は呼吸しながら青空をゆく  
なぜ画家は言葉をつづる色と線ただ見る人に託せよきを  
たましひから二次元に生るる空間へまつすぐ届く光また影  
夜の空泳ぐショーン・タンの透ける魚ひつそり煌めく日のぼるまで  
ゆつたりと間空泳ぐ大魚のうろこの綺麗に明るむ街の灯  
医師よりも検査結果のデーターが容赦なく母の現状を語る  
気休めの医師の言葉にしがみつく母のリハビリ二月空青し

鈴木結志

輻射圧

・福

久我田鶴子

二月

・羊

初春の天満書きの手本に「栄光のかけ橋」念込んで書く  
露の蘋萌ゆるいきおい日の前にコロナの斬首見せてくれぬか  
輻射圧かかる雪の反射盤春をきざしてまばゆくひかる  
月暦の七色変化輻射圧科学のしくみ物語り生む  
易運勢天敵日吉事みちびくか風土記かたりべとなりてうた詠む  
夕むらさきしずかに展く空と湖睦み合いつつ詩興を醸す  
とどかざる理想を鬼が運びくる一一四年ぶりの節分

この春の邂逅ならん遠廻りして来し社に河津桜咲く  
静もりし社殿の奥にひともとの河津桜うす紅満つる  
柔らかき早春の光の野辺遠く今日は見えたり富士の姿が  
この町のコロナ感染者今日はゼロ出会いし人と会話にのぼる  
友の今施設にありし速き日に土産に貰いし赤べこを出す  
赤べこもかつて疫病のお呪い大小揃えて玄関に置く  
何事もなき日常の貴重さをウイズコロナの今思ひ知る

つぱにさす河津桜のふた枝にみどりふき出し母よろこばす  
食べて寝るそれだけの身とああ母よ悲しむなけれそれで十分  
夫や母子の好物にわが制限加味してゆうべの献立をなす  
甘さとは多分に麻薬のようなもの絶つ苦しさののちの平穏  
ローンのロカボのパンに助けられ体質改善三年を過ぐ  
義妹の誕生日近し地場産のささげにもち米金ごまを贈う  
確執のほどけしという一枚の葉書に明るむわが四旬節

オンライン会議してゐる背後に映らぬやうに米を磨きをり  
炊きたてのこはんにいくらホタテのせ一色丼なり唇のメニューは  
食べさせて午後の勤めに送りだす緊急事態宣言つづく  
明日はまた午前の勤めに送りだす一日ごとの勤務形態  
三日ほど掃除をせねばことなく積もりるるもの氣を寒ざくる  
居どころをもとめて狭き家のなかベランダよりさき飛ぶ羽根もたず  
クロネコが運んできたるたこしゃぶに宥められつつ楽しいわが家